

平成20年度学会等発表実績

種別	1	1. 口頭、 2. 誌上
題名	<i>Pythium aphanidermatum</i> によるポインセチア根腐病の発生 (病原菌追加)	
発表者名	渡辺秀樹・堀之内勇人・加藤高伸 [*] ・桑原圭司 [*] ・高井啓 ^{**} ・景山幸二 ^{***} (岐阜農技セ [*] ・岐阜農技課 ^{**} ・岐阜地域農改セ ^{***} ・岐阜大流域研セ)	
口頭	発表会名	平成20年度日本植物病理学会大会
	(場所)	鳥根県松江市(くにびきメッセ)
	主催機関	日本植物病理学会
	発表月日	西暦 2008年 4月 27日
誌上	誌名	日本植物病理学会報
	巻号等	Vol 74 No. 3 p. 178 ~ p. 西暦 2008年 8月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>2007年8月に、岐阜県内の鉢花生産施設でポインセチアの地際茎および根が水浸状に腐敗し萎凋枯死する被害が多発生した。被害株の罹病組織から1種類の<i>Pythium</i> 属菌が高率に分離され、接種により原病徴が再現された。分離菌は、膨状の胞子のうを形成し、逸出管の先端に形成された球のうから遊走子を放出した。単一培養で有性器官を形成し、蔵卵器は主に頂生で表面平滑、大きさは平均24.9μmであった。蔵精器は主に間生で、蔵卵器に1個付着した。卵胞子は非充満性で、大きさは平均19.6μmであった。菌糸生育は5 から42 で認められ、最適温度は35 であった。これらの形態的特徴およびrDNA ITS領域の塩基配列の相同性検索の結果から、本菌を<i>P. aphanidermatum</i> (Edson) Fitzp. と同定した。本病の病原菌には高鳥ら(1975)が<i>Pythium</i> sp. として報告しているが、詳細は不明である。そこで本病の病原菌として<i>P. aphanidermatum</i> を追加したい。</p>		
(キーワード) ポインセチア、根腐病、 <i>Pythium aphanidermatum</i>		

種別	1	1. 口頭、 2. 誌上
題名	植物生育促進菌類 <i>Fusarium equiseti</i> を担持させたビール粕成型炭のトマト萎凋病及びホウレンソウ萎凋病の防除効果	
発表者名	堀之内勇人・高崎智子 [*] ・宮原照夫 [*] ・百町満朗 ^{**} (岐阜県農業技術センター [*] ・アサヒビール(株) ^{**} ・岐阜大応生)	
口頭	発表会名	平成20年度日本植物病理学会大会
	(場所)	鳥根県松江市 くにびきメッセ
	主催機関	日本植物病理学会
	発表月日	西暦 2008年 4月 28日
誌上	誌名	日本植物病理学会報
	巻号等	Vol 74 No. 3 p. 189 ~ p. 190 西暦 2008年 8月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>植物生育促進菌類<i>F. equiseti</i>を担持したビール粕成型炭(以下、含菌MC)を用いたトマト萎凋病及びホウレンソウ萎凋病に対する発病抑制効果を検討した。含菌MCは5%(w/w)割合で培養土に混和した。播種時及び移植時に含菌MCを処理したトマト苗を萎凋病菌密度を1.0×10^4 cfu/g soil に調整した汚染土に定植した。定植74日後に外観の発病を調査した結果、無処理区の発病度は39.6であったのに対し、含菌MC区の発病度は12.5と低かった。また、ペーパーポット播種時に含菌MCを処理したホウレンソウ苗を萎凋病菌密度を1.0×10^2 cfu/g soil に調整した汚染土に定植し、23日後に外観の発病を調査した。ペーパーポットのみ処理区、直播区の発病度はそれぞれ12.5、34.0であったのに対し、含菌MC区の発病度は5.6と低かった。以上のように、<i>F. equiseti</i> を担持したMCはトマト萎凋病及びホウレンソウ萎凋病に対して高い防除効果を示すことが認められた。</p>		
(キーワード) トマト、ホウレンソウ、生物防除		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	気になるトマトの病害虫対策	
発表者名	勝山直樹	
誌上	誌名	農耕と園芸
	巻号等	Vol 8 No. 5 p. 54 ~ p. 56 西暦 2008 年 5 月
	出版または発行元	株式会社 誠文堂新光社
分類	4	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>海津地域のトマト産地では平成13年度からトマト黄化葉巻病(タバコナジラミが媒介するウィルス病)が発生し始め、被害が深刻化していた。これに対し、JAにしみの海津トマト部会では技術係を中心に防除対策の実施に取り組んだ。部会が行った対策は、「ハウス開口部の防虫ネット(目合い0.4mm)被覆」、「黄色粘着テープ等による媒介虫の捕殺」、「栽培終了時の蒸し込み処理」、「年2回の一斉防除」、の4つ。これらの対策により現在、当地域ではトマト黄化葉巻病は沈静化している。この成功の最も重要なポイントは、これらの4つの対策を産地全体が一体となって取り組んだことによると考えられる。</p>		
(キーワード) トマト黄化葉巻病 総合防除対策 産地での取り組み		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	スピードスプレーヤ散布における防風ネットの農薬飛散防止効果について	
発表者名	天野昭子・神尾真司(中山間農業研究所)・須賀しのぶ・桑原圭司(農業技術課)・沢野	
誌上	誌名	関西病虫害研究会報
	巻号等	Vol 50 No. p. 189 ~ p. 191 西暦 2008 年 5 月
	出版または発行元	関西病虫害研究会
分類	1	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>果樹園でのスピードスプレーヤ散布時の農薬飛散低減対策として、防風ネットの効果について検討した。目合い4mmの防風ネットは、散布圧力1.0MPaで散布した場合、散布区域から5mの至近距離においてドリフト率が5%以内に抑制していた。このことから、防風ネットは有効な農薬飛散防止対策の一つと言える。ただし、散布圧力を2.0MPaとした場合には、1.0MPa散布時の約2倍のドリフトが認められ、ネットの効果は半減していた。</p>		
(キーワード) 農薬、飛散防止、スピードスプレーヤ、防風ネット		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	農業分野における農薬分析とその課題	
発表者名	天野昭子	
誌上	誌名	関西病虫害研究会報
	巻号等	Vol 50 No. p. 23 ~ p. 24 西暦 2008年 5月
	出版または発行元	関西病虫害研究会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>都道府県における農薬分析業務は、食品衛生法で「残留許容量」が設定されたことを受け、農薬による危被害防止あるいは対策樹立を目的として始まった。最近10年間の関西病虫害研究会報にも、十数件の研究報告が見られ、内容も作物残留や散布方法の改善、あるいは農薬の圃場外飛散に関するものなど多岐に渡っている。昨今の農薬を取り巻く情勢はますます厳しくなっているが、農業生産に欠かせない資材として、農薬を上手に使用していけるようその挙動や残留性についての調査研究を進めていく必要がある。</p>		
(キーワード) 農薬分析、研究課題		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	鉢花の底面給水栽培における銀セラミックスを用いた水媒伝染性病害の防除	
発表者名	渡辺秀樹・加藤吉成*・亀嶋 哲*・丹羽智彦*・上野 麗*・堀之内勇人・田口義広**・景山幸二***・百町満朗**** (岐阜農技セ。(株)TYK・**元 普及企画室・***岐阜大流域圏科学研究セ・****岐阜大応用生物科学部)	
誌上	誌名	関西病虫害研究会報
	巻号等	Vol 50 No. p. 87 ~ p. 89 西暦 2008年 5月
	出版または発行元	関西病虫害研究会
分類	1	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>鉢物の生産施設では、Ebb & Flow方式などの底面給水栽培の導入により大規模化が進んでいる。これらの施設では、養液の循環利用によりピシウム菌(<i>Pythium</i>属菌)や疫病菌(<i>Phytophthora</i>属菌)による被害が多発している。被害を軽減するには養液中の病原菌密度を減少させる必要があるが、従来の殺菌装置では処理能力の限界等から普及していない。そこで、銀セラミックスを用いた養液の除菌技術について検討した。銀セラミックスは、無機銀系抗菌剤をセラミックスに担持させて粒状としたものであり、銀イオンはほとんど溶出しない。このため、植物体への薬害もなく、養液組成への影響も認められていない。小規模のEbb & Flow栽培装置を用いて、養液を銀セラミックスのカラムで循環処理したところ、バラ根腐病に対して高い二次伝染抑制効果が認められた。また、実用規模の除菌装置はピシウム菌や疫病菌の遊走子に対して、10サイクルで菌密度を1/100以下に低下させることができた。本装置は、時間当たり通水量が200L/分と大量の処理が可能で、大規模生産施設における循環養液の菌密度低減対策として利用可能であると考えられた。</p>		
(キーワード) 底面給水栽培、Ebb & Flow方式、水媒伝染性病害、銀セラミックス		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	薬剤散布がトマトかいよう病菌の二次伝染に及ぼす影響		
発表者名	渡辺秀樹・白川隆* (岐阜農技セ・野菜茶業研究所)		
口頭	発表会名	第90回関西病虫害研究会大会	
	(場所)	名古屋市 名古屋大学	
	主催機関	関西病虫害研究会	
	発表月日	西暦 2008年 5月 16日	
誌上	誌名	関西病虫害研究会報	
	巻号等	Vol 50 No. p. 193 ~ p.	西暦 2008年 5月
	出版または発行元		
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>トマトかいよう病は、種子伝染、土壌伝染の他ハサミによる管理作業によって二次伝染することが以前から知られている。そこで、かいよう病菌に防除効果のない殺虫剤の散布による二次伝染の可能性について検討した。試験は、2007年7月から11月までガラス小温室(5.4m²、8部屋)を用いて行った。試験区は薬剤散布区、薬剤無散布区および無接種区とし、薬剤散布区および薬剤無散布のトマト1株にはかいよう病菌を接種した。接種株の小葉には、調査期間を通じて、10⁵~10⁸個/gの病原菌が認められた。薬剤無散布区の無接種株では、かいよう病菌は検出されなかった。一方、薬剤散布区の無接種株の小葉には、かいよう病菌が散発的に検出された(10²~10⁷個/g)。最終調査時に薬剤散布区の無接種株では、かいよう病の発病が21株中4株に認められた。また、スタンプ法による調査では、13株の葉柄基部からかいよう病菌が検出された。以上の結果から、施設栽培ではかいよう病菌に殺菌効果を有しない殺虫剤等の薬剤散布により、薬液中に本菌が浮遊し、隣接株に二次伝染する可能性が考えられた。</p>			
(キーワード) トマトかいよう病、二次伝染、薬剤散布			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	岐阜県で発生したダイコン黒芯症とその発生要因		
発表者名	堀之内勇人・渡辺秀樹・白川隆*・長谷川淳**・間宮徹***・桑原圭司**** (岐阜県農業技術センター・野菜茶業研究所・岐阜県中濃地域郡上農業改良普及センター・岐阜県病害虫防除所・岐阜県農業技術課)		
口頭	発表会名	第90回関西病虫害研究会大会	
	(場所)	名古屋市 名古屋大学	
	主催機関	関西病虫害研究会	
	発表月日	西暦 2008年 5月 16日	
誌上	誌名	関西病虫害研究会報	
	巻号等	Vol 50 No. p. 193 ~ p.	西暦 2008年 5月
	出版または発行元	関西病虫害研究会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>2004年に岐阜県の高冷地ダイコン産地において根内部が黒変する障害が多発した(以下黒芯症と称す)。黒芯症の多くは6月下旬から7月に播種し8月下旬から9月に収穫するダイコンの収穫時に観察された。被害株の葉及び根の黒芯部から黒斑細菌病菌が高率で分離された。そこで、本葉展開時に健全なダイコンに黒芯部位から分離した細菌を接種した結果、接種7日後に葉に黒斑細菌病の病斑が、接種40日後に黒芯症が観察された。このことから黒斑細菌病菌は黒芯症の原因菌であることが明らかになった。</p> <p>2007年に黒斑細菌病菌をダイコンの播種時(4月19日)から播種49日後まで約7日間間隔でそれぞれ1回接種し、黒芯症の発生程度を調査した。黒斑細菌病の病斑は全ての接種区で観察され、黒芯症は播種時から播種42日後に接種した区で観察された。このことから、黒芯症は栽培期間中、広範囲の時期に黒斑細菌病菌の感染によって引き起こされることが明らかになった。</p>			
(キーワード) トマト、ホウレンソウ、生物防除			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	カキノヘタムシガのフェロモントラップの形状と設置条件		
発表者名	鈴木俊郎 市橋秀幸 青木克典		
口頭	発表会名	第90回関西病虫害研究会大会	
	(場所)	名古屋市 名古屋大学	
	主催機関	関西病虫害研究会	
	発表月日	西暦 2008年 5月 17日	
誌上	誌名	関西病虫害研究会報	
	巻号等	Vol 50 No. p. 203 ~ p.	西暦 2008年 5月
	出版または発行元	関西病虫害研究会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>カキの難防除害虫であるカキノヘタムシガの発消長調査は、葉裏に生息している成虫を定期的に確認する「見取り調査」により行われているが、経験や労力を要することから代替する方法が望まれている。</p> <p>近年、カキノヘタムシガの性フェロモンが同定され、その合成物に強い誘引活性があることが明らかになった。そこでフェロモントラップの最適な設置条件および効率的に誘殺できるトラップの形状について検討した。</p> <p>最適な設置高については、地上から150cm程度の高さに設置することで効率的に誘殺されると考えられた。</p> <p>また、雄成虫を効率的に誘殺できるトラップは、乾式と粘着式と比較したところ、粘着式の方が誘殺数が多く、形状については、開口部が2方向の武田式粘着トラップよりも4方向あるウイングトラップへの誘殺数が多かった。</p>			
(キーワード) カキノヘタムシガ、性フェロモン、フェロモントラップ、予察			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	家畜ふん堆肥の種類に応じた窒素肥効評価法 第7報 有機成分を加味した豚ふん堆肥の窒素無機化パターンのモデル化		
発表者名	棚橋寿彦・小柳渉*・村上圭一**・石岡巖***・加藤直人*** (岐阜県農業技術センター・*新潟県農業総合研究センター・**三重県農業研究所・***独)中央農業研究センター)		
口頭	発表会名	日本土壌肥料学会2008年度愛知大会	
	(場所)	名古屋市 名古屋市立大学	
	主催機関	日本土壌肥料学会	
	発表月日	西暦 2008年 9月 9日	
誌上	誌名	日本土壌肥料学会 講演要旨集 第54集	
	巻号等	Vol 54 No. p. 155 ~ p.	西暦 2008年 9月
	出版または発行元	日本土壌肥料学会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>豚ふん堆肥について地温に応じた経時的な窒素肥効評価が可能となるよう共通なモデル式の作成とポット栽培による検証を行った。</p> <p>豚ふん堆肥には有機化・無機化並行型「$N=A1(1-\exp(-k1t))+A2(1-\exp(-k2t))+C$」が適合し、共通の活性化エネルギー・速度定数が求まった。有機化窒素量は短期培養により、無機化窒素量は酸性デタージェント分析値により推定可能であった。コマツナ栽培における窒素肥効とモデル式により地温から計算した無機態窒素量の関係は、夏期栽培3作、秋冬栽培2作においてほぼ一致し、モデルによる推定が検証された。</p>			
(キーワード) 豚ふん堆肥、窒素肥効、無機態窒素、酸性デタージェント分析			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	メタラキシル粒剤とシアゾファミド水和剤を用いたホウレンソウべと病の防除	
発表者名	堀之内勇人・渡辺秀樹・浅野雄二*・桑原圭司**・小枝俊仁*** (岐阜県農業技術センター・*岐阜県中山間農業研究所・**岐阜県病害虫防除所・***岐阜県西濃地域農業改良普及センター)	
口頭	発表会名	平成20年度日本植物病理学会 関西部会
	(場所)	和歌山市 和歌山ビッグ愛
	主催機関	日本植物病理学会
	発表月日	西暦 2008年 9月 19日
誌上	誌名	日本植物病理学会報
	巻号等	Vol 75 No. 1 p. 69 ~ p. 70 西暦 2009年 2月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) 岐阜県のホウレンソウ産地ではべと病菌レース1から5の抵抗性品種が栽培されていたが、2006年にこれらの品種でべと病が発生した。現在、新しい抵抗性品種の導入が急がれているが、一部の作型で新品種が未導入であるため、薬剤による防除効果を検討した。2008年1月に品種アスパイアー(R1-5)を播種し、播種13日後に試験区の一部にべと病菌(濃度 10^4 spores/ml)を接種した。播種55日後の薬剤無処理区の発病葉率は48.1%であったのに対し、メタラキシル粒剤(以下、Me粒剤) 6kg/10a, 9kg/10a播種時処理区及びシアゾファミド水和剤(以下、Cy水和剤)の3回(播種34, 41及び48日後)散布区はそれぞれ25.0, 17.5及び5.2%であった。Me粒剤を6kg/10a処理しCy水和剤を播種34日後に1回散布した区は発病葉率2.2%とべと病の発病が最も少なかった。2008年3月に同様の試験を行った。播種44日後の薬剤無処理区の発病葉率は22.3%であったが、Me粒剤を播種時に6kg/10a処理しCy水和剤を播種33日後に1回散布した区は発病葉率1.0%と高い防除効果が認められた。		
(キーワード) トマト、ホウレンソウ、生物防除		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	高温性ピシウム属菌の水耕養液中からの簡易検出	
発表者名	渡辺秀樹・景山幸二*・田口義広**・堀之内勇人・百町満朗*** (岐阜農技セ*・岐阜大流域研セ**元 岐阜普及企画室***岐阜大応生)	
口頭	発表会名	平成20年度日本植物病理学会 関西部会
	(場所)	和歌山市 和歌山ビッグ愛
	主催機関	日本植物病理学会
	発表月日	西暦 2008年 9月 19日
誌上	誌名	日本植物病理学会報
	巻号等	Vol 75 No. 1 p. 74 ~ p. 西暦 2009年 2月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) ベントグラス葉トラップにより <i>Pythium helicoides</i> が効率的に捕捉できることを既に報告した(2002 関西病虫害研究会)。そこで、本研究では他の高温性ピシウム属菌も含めた本法の適応性について検討した。 <i>P. helicoides</i> 、 <i>P. aphanidermatum</i> および <i>P. myriotylum</i> の遊走子は40個/Lの密度の場合1日で捕捉でき、捕捉期間を長くするほど検出感度は向上した。また、選択培地を用いたトラップからの分離温度について検討したところ、38および40 度でも分離頻度はほとんど低下しなかった。そこで、養液栽培施設の循環養液にトラップを設置し、回収したトラップを38 度で分離して調査した結果、トマト施設では <i>P. aphanidermatum</i> と <i>P. myriotylum</i> 、カランコエ施設では <i>P. helicoides</i> と <i>P. myriotylum</i> が高率に検出された。さらにミニバラおよびカランコエ生産施設において、経時的に循環養液の調査をしたところ、 <i>P. helicoides</i> が発病の30日以上前から検出されることが明らかとなった。これらの結果から、本法は養液栽培施設における高温性ピシウム属菌のモニタリングに利用可能であると考えられた。		
(キーワード) 高温性ピシウム属菌、検出、ベントグラス葉トラップ		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	不織布製ポットを利用したトマト独立ポット耕栽培 (第5報)培養液処方の違いが、生育及び収量に及ぼす影響		
発表者名	安田雅晴・越川兼行・勝山直樹		
口頭	発表会名	園芸学会平成20年度秋季大会	
	(場所)	津市 三重大学	
	主催機関	園芸学会	
	発表月日	西暦 2008年 9月 27日	
誌上	誌名	園芸学研究	
	巻号等	Vol 7 No. 別冊2 p. 526 ~ p.	西暦 2008年 9月
	出版または発行元	園芸学会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>第3報(園学雑75別2)において明らかにした独立ポット耕栽培におけるトマトの養分吸収特性より、過不足のない培養液管理のためには、生育ステージ別に2~3種類(新処方A~C)の培養液処方を使用する新培養液処方を開発した。この新培養液処方を、掛流し栽培及び循環栽培において、山崎トマト処方と比較し、実用性を検討した。掛流し栽培では、新培養液処方では新処方Cを使用した時期にMg欠乏症状が生じ、実用性はなかった。循環栽培では、新培養液処方は山崎トマト処方に比べ、循環培養液の組成を安定させることが可能で、新処方Cを使用した時期にMg欠乏症状が生じることもなく、高い実用性が認められた。</p>			
(キーワード) トマト、養液栽培、培養液処方、循環栽培			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	カキ果皮のメラニン生成抑制作用と活性成分の変動		
発表者名	新川 猛 ¹ ・大口健司 ² ・鈴木哲也 ¹ ・飯沼宗和 ³ (¹ 岐阜農技セ・ ² (財)岐阜国際バイオ研・ ³ 岐阜薬科大学)		
口頭	発表会名	園芸学会平成20年度秋季大会	
	(場所)	津市 三重大学	
	主催機関	園芸学会	
	発表月日	西暦 2008年 9月 27日	
誌上	誌名	園芸学研究	
	巻号等	Vol 7 No. 別冊2 p. 362 ~ p.	西暦 2008年 9月
	出版または発行元	園芸学会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>カキ果皮の抽出エキスは、マウスのB16メラノーマ細胞ならびに正常ヒト皮膚3次元モデルにおいて、メラニン生成を抑制する作用が認められた。エキスを精製して成分同定を行ったところ、活性成分は2種類のクエルセチン配糖体isoquercitrinとhyperinであった。これら2種類のクエルセチン配糖体は、果肉に比べて果皮に50~100倍の濃度で含まれ、果皮に同定することが明らかとなった。果皮では着色が始まると増加する傾向にあり、幼果と比べて成熟果では約2倍の含有量となった。収穫適期果実の品種間差は約3倍で、完全甘柿の方が渋柿より高い傾向にあった。甘柿と渋柿では2種類の配糖体の構成比が異なり、甘柿で1:1、渋柿では1:2~3とisoquercitrinの比率が高かった。</p>			
(キーワード) カキ、果皮、メラニン生成抑制、クエルセチン配糖体、品種間差、成分変動			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	カキ‘太秋’の条紋と黒変汚損果に関する研究		
発表者名	鈴木哲也1・尾関健2・新川猛1 (1岐阜農技セ・2岐阜地域農改普セ)		
口頭	発表会名	園芸学会平成20年度秋季大会	
	(場所)	津市 三重大学	
	主催機関	園芸学会	
	発表月日	西暦 2008年 9月 28日	
誌上	誌名	園芸学研究	
	巻号等	Vol 7 No. 別冊2 p. 463 ~ p.	西暦 2008年 9月
	出版または発行元	園芸学会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>カキ‘太秋’における条紋と黒変汚損果の発生傾向について、同一樹体を用いた継続調査を実施した。岐阜農技センター植栽の平成10年植え‘太秋’17樹を供試した。条紋ならびに黒変汚損果の発生率は、2004年からの4カ年間、毎年収穫直前の10月中旬に調査した。条紋については、樹体間差が小さく、収穫直前の降雨による影響が大きい。黒変汚損果については、樹体間差が極めて大きく多発生樹では毎年発生率が高いことから、このような樹については早期の更新が必要であると考えられた。</p>			
(キーワード) カキ、太秋、条紋、汚損果			

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上		
題名	冬春期のキュウリ栽培における空気膜の利用方法および省エネ効果		
発表者名	勝山直樹1・福田富幸1・越川兼1・植野耕造2 (1岐阜農技セ・2東罐興産(株))		
口頭	発表会名	園芸学会平成20年度秋季大会	
	(場所)	津市 三重大学	
	主催機関	園芸学会	
	発表月日	西暦 2008年 9月 28日	
誌上	誌名	園芸学研究	
	巻号等	Vol 7 No. 別冊2 p. 255 ~ p.	西暦 2008年 3月
	出版または発行元	園芸学会	
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他	
(要旨)			
<p>原油価格の高騰による暖房経費の上昇は施設園芸農家の経営を著しく圧迫している。そこで、暖房用燃料の削減を目的に、空気を持つ高い断熱性を利用した被覆資材である空気膜の省エネ効果、作物(キュウリ)の収量や、果実品質に及ぼす影響を検討した。</p> <p>外張りを空気膜で被覆したハウスで年2作キュウリを栽培したところ、慣行(外張り、内張りとも一重被覆)と比較して、36%の節油効果があった。また、内張りに空気膜を用いた場合にも節油効果は認められたが、空気膜内への送風を連続方式から間断方式(15分送風+30分停止)に変更することや内張り妻面や側面に被覆資材を追加することでより削減率は高まり、28%であった。さらに外張りとも内張りの両方に空気膜を利用した場合には、節油効果は55%にまで高まった。なお、いずれの場合にもキュウリの収量や、果実品質の影響は認められなかった。</p> <p>また、空気膜ハウスは外張りに用いた場合慣行と比較して昼間の温度が高くなりやすい一方、透過光率は10%弱低下した。また、節油率が高まる(=暖房機の稼働時間が短縮される)ほど、夜間のハウス内湿度は高まり、外張り、内張りに併用した場合、平均で夜間湿度や約10%上昇した。</p>			
(キーワード) 原油価格高騰、省エネ、空気膜、冬春キュウリ			

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	Growth characteristics of a small-fruit dwarf mutant arising from bud sport mutation in Japanese persimmon(<i>Diospyros kaki Thunb.</i>)	
発表者名	Hisayo Yamane, Megumi Ichiki, Ryutaro Tao, Tomoya Esumi, and Keizo Yonemori (Graduate School of Agriculture, Kyoto University) Takeshi Niikawa (Gifu Prefectural Agricultural Technology Center) Hino Motosugi (University Farm, Kyoto Prefectural University)	
誌上	誌名	Hort Science
	巻号等	Vol 43 No. 6 p. 1726 ~ p. 1730 西暦 2008年 10月
	出版または発行元	American Society for Horticultural Science
分類	1	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>Fruit size is one of the most important traits that affect the economic value of fruit. In persimmon (<i>Diospyros Kaki Thunb.</i>), somatic and bud-sport mutations that affect the fruit traits are frequently observed. Recently, a small-fruit mutant, Totsutanenashi (TTN), was discovered in Japan as a bud-sport mutant of the leading cultivar 'Hiratanenashi' (HTN). In this study, we investigated the morphological and physiological characteristics of TTN and HTN, focusing on the tree architecture, fruit size, and the fruit flesh chemical composition. The objectives of the study were to evaluate the potential horticultural use of TTN and to characterize the differences between HTN and TTN. Both TTN and HTN are nonaploid plants, indicating that a difference in ploidy is not the cause of the small-fruit mutation. The vegetative growth of trees and tissue-cultured shoots of TTN was more compact than that of HTN. The floral organs of TTN appeared similar to those of HTN flowers. The fruit size of TTN was consistently lower than of HTN at all fruit developmental stages. TTN fruit had a higher sugar content and a higher proportion of sucrose to total</p>		
(キーワード) dwarf rootstock, fruit size, sugar composition, tannin, tissue culture		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	鶏ふん堆肥のアンモニア態窒素による窒素肥効評価法の検証	
発表者名	棚橋寿彦・矢野秀治・小柳涉*・村上圭一**・加藤直人*** (岐阜県農業技術センター・*新潟県農業総合研究センター・**三重県農業研究所・***独)中央農業研究センター)	
口頭	発表会名	日本土壌肥料学会中部支部第88回例会
	(場所)	富山市 富山県民共生センター
	主催機関	日本土壌肥料学会中部支部
	発表月日	西暦 2008年 10月 30日
誌上	誌名	日本土壌肥料学会中部支部第88回例会 講演要旨集
	巻号等	Vol 88 No. p. 7 ~ p. 8 西暦 2008年 10月
	出版または発行元	日本土壌肥料学会中部支部
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>鶏ふんの2種類のアンモニア態窒素に基づく4週・30 培養相当の無機態窒素量の推定方法について水稲およびコマツナ・ソルゴーのポット栽培において検証を行った。その結果、この推定法により得られた窒素肥効に、作期に応じて2mg/gの緩効的窒素を加えることで水稲の基肥代替や畑作で精度よく推定できることが検証された。</p>		
(キーワード) 鶏ふん堆肥、窒素肥効、アンモニア態窒素		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	自走型送風式捕虫機による茶吸汁性害虫の防除効果	
発表者名	米山誠一、西野英治(滋賀県農業技術振興センター茶業指導所)、角川 修((独)農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所)、寺田 均((株)寺田製作所)	
口頭	発表会名	茶業技術研究発表会
	(場所)	鹿児島市 鹿児島県市町村自治会館
	主催機関	日本茶業技術協会
	発表月日	西暦 2008年 11月 26日
誌上	誌名	茶業研究報告
	巻号等	Vol 106 No. 別冊 p. 138 ~ p. 139 西暦 2008年 11月
	出版または発行元	日本茶業技術協会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) 演者らは中山間地茶園において導入可能な送風式防除機とそれを活用した減農薬防除技術の開発をすすめている。滋賀県農業技術振興センター、(独)野菜茶業研究所、(株)寺田製作所が共同で開発した自走型送風式捕虫機のチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、カンザワハダニに対する防除効果を検討した。チャノミドリヒメヨコバイの少発生条件下においては、週1回の捕虫処理で被害防止効果が得られると考えられた。チャノキイロアザミウマについては、少～中発生条件下において週2回の捕虫機処理で防除効果はあるが、被害防止効果は少ないと考えられた。カンザワハダニの中発生条件下では、週2回の捕虫機処理で高い防除効果が得られることが明らかとなった。		
(キーワード) チャ、送風式捕虫機、チャノミドリヒメヨコバイ		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	バラ根腐病の発生生態と防除	
発表者名	渡辺秀樹	
誌上	誌名	植物防疫
	巻号等	Vol 62 No. 11 p. 597 ~ p. 600 西暦 2008年 11月
	出版または発行元	社団法人 日本植物防疫協会
分類	4	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) バラ根腐病は <i>Pythium helicoides</i> によって引き起こされる病害で、1996年に岐阜県下のミニバラ生産施設で初めて確認された。これまで本菌によるバラの病害は海外でも報告がなく、日本においてバラ根腐病は <i>P. helicoides</i> が初めて病原として認知された病害である。本菌は、高温条件下でも生育可能なピシウム属菌の一種であり、国内では最近になってカランコエ、イチゴおよびキクで被害が報告された。近年、国内では夏期の異常高温が半ば常態化しつつある中で、高温性のピシウム属菌による被害の拡大が懸念されている。そこで、バラ根腐病の発生生態と防除対策について、これまでの試験結果を踏まえて紹介した。		
(キーワード) バラ根腐病、 <i>Pythium helicoides</i> 、防除		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	Bait method to detect <i>Pythium</i> species that grow at high temperatures in hydroponic solutions	
発表者名	Hideki Watanabe, Koji Kageyama, Yoshihiro Taguchi, Hayato Horinouchi and Mitsuro Hyakumachi	
誌上	誌名	Journal of General Plant Pathology
	巻号等	Vol. 74 No. 6 p. 417 ~ p. 424 西暦 2008年 12月
	出版または発行元	
分類	1	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p><i>Pythium helicoides</i>、<i>P. aphanidermatum</i> および <i>P. myriotylum</i> は高温性のピシウム属菌で、近年これらの菌による被害が養液栽培施設およびEbb & Flowなどの底面給水施設で発生している。そこで、本研究では捕捉法を用いて高温性ピシウム属菌のみを選択的に検出する手法について検討した。捕捉基質として、キュウリ、アサ、エゴマ、トマト、ダイコン、キビの種子、ベントグラスおよびバラの葉を用いたところ、ベントグラス葉の捕捉能力が最も高かった。ベントグラス葉トラップを用いると、供試菌の遊走子は40個/Lの密度の場合1日で捕捉でき、捕捉期間を長くするほど検出感度は向上した。また、選択培地を用いたトラップからの分離温度について検討した結果、38および40 °Cでも分離頻度はほとんど低下しなかった。そこで、養液栽培施設の循環養液にトラップを設置し、回収したトラップを38 °Cで分離して調査した結果、トマト施設では <i>P. aphanidermatum</i> と <i>P. myriotylum</i>、カランコエ施設では <i>P. helicoides</i> と <i>P. myriotylum</i> が高率に検出された。さらにミニバラおよびカランコエ生産施設において、経時的に循環養液の調査をしたところ、<i>P. helicoides</i> が発病の30日以上前から検出されることが明らかとなった。これらの結果から、本法は養液栽培施設における高温性ピシウム属菌のモニタリングに利用可能であると考えられた。</p>		
(キーワード) 高温性ピシウム属菌、検出、ベントグラス葉トラップ		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	独立ポット耕栽培	
発表者名	安田雅晴	
誌上	誌名	農業技術体系・野菜編追録第33号
	巻号等	Vol. 基礎編 No. 654 p. 48 ~ p. 52 西暦 2008年 12月
	出版または発行元	社団法人 農山漁村文化協会
分類	4	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>トマトの土耕栽培は、土壌病害を抑制するために土壌消毒や接木栽培を行う必要があり、また、トマトの収穫位置が地際になるため、作業姿勢が悪くなるなど、生産者にかかる負荷が大きい。一方、収量等を向上するために養液栽培が導入されているが、ロックウール栽培等の既存の養液栽培の多くは、導入コストが高く、培地が連続しているため土壌病害が伝染しやすい問題がある。そこで、土壌病害に対するリスクが少なく自根苗でも安定して栽培可能で、生産費や環境負荷を低減するため多収穫を目指したトマトの低コストな養液栽培システム「独立ポット耕栽培」を開発した。独立ポット耕栽培は、トマトを1株ごとに不織布製ポットで栽培し、根域、給液及び排液を独立させる栽培システムであり、土壌病害の伝染抑制、自根栽培可能、収穫作業姿勢の改善、少量培地、生育のコントロールが容易、高収量、低導入コスト等の特徴がある。</p>		
(キーワード) トマト、養液栽培		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	トマト=独立ポット耕栽培	
発表者名	安田雅晴	
誌上	誌名	最新農業技術 野菜
	巻号等	Vol. 1 No. p. 231 ~ p. 235 西暦 2008年 12月
	出版または発行元	社団法人 農山漁村文化協会
分類	4	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>トマトの土耕栽培は、土壤病害を抑制するために土壤消毒や接木栽培を行う必要があり、また、トマトの収穫位置が地際になるため、作業姿勢が悪くなるなど、生産者にかかる負荷が大きい。一方、収量等を向上するために養液栽培が導入されているが、ロックワール栽培等の既存の養液栽培の多くは、導入コストが高く、培地が連続しているため土壤病害が伝染しやすい問題がある。そこで、土壤病害に対するリスクが少なく自根苗でも安定して栽培可能で、生産費や環境負荷を低減するため多収穫を目指したトマトの低コストな養液栽培システム「独立ポット耕栽培」を開発した。独立ポット耕栽培は、トマトを1株ごとに不織布製ポットで栽培し、根域、給液及び排液を独立させる栽培システムであり、土壤病害の伝染抑制、自根栽培可能、収穫作業姿勢の改善、少量培地、生育のコントロールが容易、高収量、低導入コスト等の特徴がある。</p>		
(キーワード) トマト、養液栽培		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	農業日誌 日誌のしおり カキの糖度向上技術、空気膜による省エネ効果、イチゴ高設栽培の省エネ栽培技術、	
発表者名	鈴木哲也、勝山直樹、松尾尚典、加藤克彦	
誌上	誌名	農業日誌 日誌のしおり
	巻号等	Vol. 1 No. p. ~ p. 西暦 2009年 1月
	出版または発行元	社団法人 全国農林統計協会連合会
分類	4	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>カキの糖度向上技術 … 48 ~ 49ページ 空気膜による省エネ効果 … 292 ~ 293ページ イチゴ高設栽培の省エネ栽培技術 … 320 ~ 321ページ 生分解性ポット利用技術 … 394 ~ 395ページ</p>		
(キーワード) 農業日誌、日誌のしおり		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	植物保護と技術士 - 植物保護におけるフェロモン利用の現状と展望 -	
発表者名	市橋 秀幸	
誌上	誌名	今月の農業
	巻号等	Vol 53 No. 1 p. 64 ~ p. 71 西暦 2009年 1月
	出版または発行元	化学工業日報社
分類	4	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>フェロモンの植物保護での応用について、発生予察と防除に分けて解説した。 発生予察への利用では、フェロモントラップによる発生活長調査は、従来から利用されている予察灯に比べ、設置が容易、調査が簡易など、利点が多いため、一般的に用いられている。 防除への利用は、大量誘殺、交信かく乱、アトラクト&キルなどがある。大量誘殺は、多くのフェロモントラップを設置して、害虫を大量に誘殺して密度を下げようという方法である。交信かく乱は、性フェロモンを高濃度では場に充満させて、害虫が交尾相手を探せなくして、子孫を残さないようにする方法である。アトラクト&キルは、大量誘殺の一種でトラップを用いず、誘引された害虫をその場で殺す方法である。それぞれ一長一短があり、現在の性フェロモン利用の主流は、交信かく乱になっている。アトラクト&キルは、コウチュウ目害虫で実用化されている。 交信かく乱剤の現場での活用事例として、本巢市カキ園での調査結果を紹介した。 最後に、フェロモン利用の今後を展望した。</p>		
(キーワード) 植物保護、フェロモン利用、技術士		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	パイプダスタを用いたDL粉剤散布時のドリフト実態調査	
発表者名	天野昭子、須賀しのぶ	
口頭	発表会名	日本農薬学会 第34回大会
	(場所)	東京都 東京大学
	主催機関	日本農薬学会
	発表月日	西暦 2009年 3月 18日
誌上	誌名	日本農薬学会 第34回大会講演要旨
	巻号等	Vol No. p. 59 ~ p. 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	日本農薬学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>パイプダスタを用いてDL粉剤を散布した時の、農薬の周辺への飛散について調査した。MEP粉剤DLをパイプダスタで散布し、50m地点までの落下量と水平方向へのドリフト率を測定したところ、10m地点での地表でのドリフト率は約3%、地上200cmでのドリフト率は約0.7%であった。50m地点では地表で0.3%、地上200mで0.1%のドリフトが確認された。散布終了30分後にも25m地点で0.16%のドリフトが確認されたが、35m以降では確認されなかった。隣接する雨よけハウス内においても農薬が検出されており、防虫ネットの粉剤遮蔽効果は認められなかった。DL粉剤は液剤よりもドリフトの危険性は高いと考えられる。</p>		
(キーワード) ドリフト、DL粉剤、パイプダスタ		

種別	1	1. 口頭、 2. 誌上
題名	カスガマイシン・銅水和剤および野生種エンバク(ヘイオーツ)を用いたダイコン黒芯症の防除	
発表者名	堀之内勇人・渡辺秀樹・白川 隆* (岐阜県農業技術センター・*野菜茶業研究所)	
口頭	発表会名	平成21年度日本植物病理学会大会
	(場所)	山形市 山形大学
	主催機関	日本植物病理学会
	発表月日	西暦 2009年 3月 26日
誌上	誌名	第21回日本植物病理学会大会講演要旨
	巻号等	Vol. No. p. 89 ~ p. 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>2004年に岐阜県の高冷地ダイコン産地において根内部が黒変する障害が多発した(以下、黒芯症)。黒芯症は黒斑細菌病(病原菌:Pseudomonas syringae pv. maculicola)の一症状で、播種28日後に病原菌を接種すると黒芯症は顕著に発生した(堀之内ら)。そこで今回は、薬剤の防除効果および野生種エンバク(ヘイオーツ)による伝染抑制効果について検討した。試験1は2008年4月~6月に、試験2は8月~10月に品種:夏つかさを用いて実施した。試験1と2の無処理区の黒芯症の発症株率がそれぞれ45.8%, 8.3%であったのに対し、カスガマイシン・銅水和剤を播種約2, 3, 4週間後の3回散布することで発症株率はそれぞれ3.3%, 0%と防除効果が認められた。周囲をヘイオーツで囲った区では黒斑細菌病の発病は低く推移し、試験1で無処理区の播種38, 50, 63日後の発病葉率がそれぞれ21.5%, 90.0%, 77.9%であったのに対して処理区では0.2%, 45.4%, 59.9%と伝染抑制効果が認められた。ヘイオーツ処理区の黒芯症の発症株率も試験1で10.7%, 試験2で2.1%と低かった。</p>		
(キーワード) ダイコン、黒芯症、黒斑細菌病、防除		

種別	1	1. 口頭、 2. 誌上
題名	トマト葉かび病菌におけるアゾキシストロピン耐性菌の発生	
発表者名	渡辺秀樹・桑原圭司*・杖田浩二**・堀之内勇人・石井英夫*** (岐阜農技セ・岐阜防除所・**岐阜農技課・***農環研)	
口頭	発表会名	平成21年度日本植物病理学会大会
	(場所)	山形市 山形大学
	主催機関	日本植物病理学会
	発表月日	西暦 2009年 3月 27日
誌上	誌名	第21回日本植物病理学会大会講演要旨
	巻号等	Vol. No. p. 152 ~ p. 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨)		
<p>岐阜県のトマト産地において、葉かび病に対するアゾキシストロピン水和剤の効果低下が懸念されたため、県内の平坦地域および中山間地域から2007~2008年に葉かび病菌271菌株を採集し、本剤に対する感受性について検討した。没食子酸n-プロピル2mMを添加したPDA培地に、アゾキシストロピンを1, 10, 100ppmとなるように添加し、菌叢ディスクまたは菌糸磨砕液を置床して25℃で20日間培養した。その結果、菌株間で薬剤感受性に差が認められ、菌叢ディスクの場合は100ppmで52.8%、菌糸磨砕液の場合は1ppmで44.6%、100ppmでは22.1%の菌株に生育が認められた。そこで、培地上で感受性に差が認められた菌株を用いて、パイプハウスで薬剤防除試験を行った。定植18日後のトマトに本剤(有効成分20%)の2000倍液を散布後、供試菌株の孢子懸濁液を接種した。接種30日後に各区の発病程度を調べた結果、防除価は5~99と菌株間で明らかに差が認められたことから、本剤に対する耐性菌が存在することが明らかになった。</p>		
(キーワード) トマト葉かび病、アゾキシストロピン、耐性菌		

種別	1	1. 口頭、 2. 誌上
題名	岐阜県におけるトマト葉かび病菌のアゾキシストロピン感受性の低下	
発表者名	渡辺秀樹	
口頭	発表会名	第19回殺菌耐性菌研究会シンポジウム
	(場所)	山形市 山形大学
	主催機関	殺菌剤耐性菌研究会
	発表月日	西暦 2009年 3月 29日
誌上	誌名	第19回殺菌耐性菌研究会シンポジウム講演要旨集
	巻号等	Vol. 19 No. p. 42 ~ p. 49 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	日本植物病理学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) 葉かび病は、トマトの主要病害の一つである。近年、岐阜県内の生産施設で本病による被害が多発している。その要因の一つとしてアゾキシストロピンに対する感受性の低下が懸念された。そこで、2007年から2008年に県内の63施設から採集した葉かび病菌271菌株を用いて耐性検定試験を行った。没食子酸n-プロピル2mMを添加したPDA培地に、アゾキシストロピンを0、1、10、100mg L ⁻¹ となるように添加し、菌叢ディスクまたは菌糸磨砕液を置床して25℃で20日間培養した。その結果、いずれの方法でも各検定培地上の菌糸生育の有無から3グループ(A: MIC 1mg L ⁻¹ 、B: MIC 10mg L ⁻¹ 、C: MIC > 100mg L ⁻¹)に分けることができた。さらに、各グループの代表菌株を用いて接種試験を行ったところ、菌糸磨砕液でBおよびCグループに類別された菌株では、明らかに防除効果も劣っていた。これらのことから、BおよびCグループの菌株を耐性菌であると考え、供試した271菌株を類別すると、45%がアゾキシストロピン耐性菌であり、耐性菌は全調査施設の65%で発見されたことが明らかとなった。また、耐性菌が確認された主産地の31施設のうち、24施設は耐性菌比率が80%以上であった。さらに、これらの施設でのアゾキシストロピン水和剤の使用頻度を調べたところ、いずれの施設でも使用頻度は高かった。以上の結果から、岐阜県内では耐性菌が広く分布しており、本剤の多用が耐性菌の発生に寄与していることが示唆された。		
(キーワード) トマト葉かび病、アゾキシストロピン、耐性菌		

種別	1	1. 口頭、 2. 誌上
題名	フェロモントラップによるフジコナカイガラムシの次世代幼虫発生時期の予測	
発表者名	鈴木俊郎*・市橋秀幸*・妙楽崇**(*岐阜農技セ:**岐阜防除所)	
口頭	発表会名	第53回日本応用動物昆虫学会大会
	(場所)	札幌市 北海道大学
	主催機関	日本応用動物昆虫学会
	発表月日	西暦 2009年 3月 29日
誌上	誌名	第53回日本応用動物昆虫学会大会講演要旨集
	巻号等	Vol. No. p. 83 ~ p. 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	日本応用動物昆虫学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) フジコナカイガラムシ(<i>Planococcus kraunhiae</i>)は、カキの果実とヘタの隙間に好んで寄生し、成長するに従い口ウ物質に覆われるため、薬剤散布効果が低い難防除害虫となっている。防除適期は第1世代ふ化幼虫時期で、それ以降は世代の混在や、果実の肥大によりヘタとの隙間が増えることから、防除効果が著しく低下する。そのため、発生時期を正確に把握する方法の開発が望まれている。 近年、フジコナカイガラムシの性フェロモンが同定され、その合成物に強い誘引活性があることが明らかになった。そこで岐阜県のカキ園において、フェロモントラップへの誘殺時期、発育零点そして有効積算温度に基いた第1世代幼虫の発生時期予測と、見取り調査による比較を行った。越冬世代雄成虫の誘殺ピークは5/15と5/25に認められたため、5/15を起点とすると次世代1齢幼虫の発生は6/23と予想された。見取り調査では1齢幼虫の発生は6/19から確認され、7/9にピークが認められた。		
(キーワード) フジコナカイガラムシ、フェロモントラップ、発生予測		

種別	1 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	カキノヘタムシガ交信かく乱剤を基軸としたカキ害虫防除体系の実証	
発表者名	鈴木俊郎・市橋秀幸(岐阜農技セ)	
口頭	発表会名	第53回日本応用動物昆虫学会大会 小集会「果樹の難防除害虫研究会」
	(場所)	北海道大学
	主催機関	日本応用動物昆虫学会
	発表月日	西暦 2009年 3月 29日
誌上	誌名	第53回日本応用動物昆虫学会大会講演要旨集
	巻号等	Vol No. p. 207 ~ p. 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	日本応用動物昆虫学会
分類	3	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) カキの難防除害虫であるカキノヘタムシガ(<i>Stathmopoda masinissa</i>)の性フェロモンがE4,Z6-16:OAc,E4,Z6-16:OH,E4,Z6-16:Ald(以下OAc,OH,Ald)と同定され、OAcとAldの10:1混合物に強い誘引活性があることが明らかとなった。そこで岐阜県内のカキ園において、2種成分を含有するカキノヘタムシガの交信かく乱剤、ハマキコンNそしてスカシバコンの3種交信かく乱剤を併用し、薬剤の散布回数を削減した圃場を設置し、平成18~20年の3年間、各害虫への防除効果の推移とマイナー害虫の発生について調査を行った。 カキノヘタムシガは初年度より高い防除効果が認められた。ハマキムシ類、ヒメコスカシバは初年度、モニタリングトラップへの誘殺がわずかに認められ、被害も散見されたが、2、3年目の調査では、誘殺や被害は認められなかった。マイナー害虫の調査では、ハスモンヨトウ、イラガ類による葉の食害が確認されたが、収量に影響する害虫の発生は認められなかった。		
(キーワード) IPM、カキノヘタムシガ、フジコナカイガラムシ、フェロモン、交信攪乱、発生予察		

種別	2 1. 口頭、 2. 誌上	
題名	6 - 1 物理的防除と生物防除の組み合わせ	
発表者名	堀之内勇人・百町満朗* (岐阜県農業技術センター・*岐阜大学応用生物科学部)	
誌上	誌名	微生物と植物の相互作用 - 病害と生物防除 -
	巻号等	Vol No. p. 354 ~ p. 360 西暦 2009年 3月
	出版または発行元	ソフトサイエンス社
分類	2	1. 学術論文 2. 学術図書 3. 講演・報告 4. その他
(要旨) 拮抗微生物を用いた生物防除は、土壌病害に対しても多くの研究報告がある。しかし、生産現場で拮抗微生物を用いた場合、現場の諸条件に大きく左右されるため、防除効果が不安定な事例がある。また、一般的に土壌に拮抗微生物を処理すると、土壌中の他の微生物などの影響により拮抗微生物の定着が阻害される場合がある。そこで、拮抗微生物による発病抑制効果を高めるために、物理的防除法と組み合わせるとトマト根腐萎凋病に対する防除効果を検討した。拮抗微生物 <i>Fusarium equiseti</i> を処理したトマト苗を生分解性ポットとともに病原菌汚染圃場に定植すると、 <i>F. equiseti</i> 単独処理と比較して高い防除効果が得られた。また、生分解性ポット内の根圏土壌中での <i>F. equiseti</i> 菌量は高く推移したことから、生分解性ポットの使用は拮抗微生物の定着を促進する働きがあることが明らかになった。以上の結果から、拮抗微生物と生分解性ポットを組み合わせることで、土耕栽培のトマト根腐萎凋病に対しても安定した高い防除効果を得ることができた。		
(キーワード) 生物防除、トマト、根腐萎凋病、 <i>Fusarium equiseti</i> 、生分解性ポット		